

願生の事由と理由

金子 大 榮

曇鸞の『論註』を披けば、吾々は先づ願生の事由と理由といふ問題を課せらるゝ。その五三義意なるものは、明かに願生の要求せらるゝ事由である。併し吾々は夫等の事由の上に深く願生の理由が貫通してゐることを感ずる。思ふに世親の「浄土論」は、よく願生の理由を顯はせるものであらう。併し理由は如何に充分であつても、それは直ちに現實の人生の上に力を現はすものではない。事由はたとへそのみでは普遍的意味を有せぬにしても、それに依りてのみ理由の自證を得しむるものである。これ理由開題の『浄土論』を註せんとして、先づ事由を點出せる曇鸞の微意であらうか。ともあれ願生の事由と理由との交渉を如實に知ることが、曇鸞の教學を眞に領解する所以と思はるゝのである。

吾々は先づ難易二道の説に於いて龍樹と曇鸞との同異を明かにして置かねばならぬ。古來龍樹は行體に依りて難易を分てるを、曇鸞は繼承して更らに行縁の別たらしめたといつてゐる。げに龍樹

は行諸難行久乃可得と説いてゐる限り行そのものを難しとするのであらう。併し曇鸞も行自體の難を豫想して、更らに行縁の方面より説明したのであるから、行體と行縁とのみでは、兩者の別は充分に明かでないようである。龍樹の難易といふは行そのものに就いてはあるが、しかし行の根本は行者であるから、難易二行は畢竟行者が丈夫志幹であるか懦弱怯劣であるかを反照するものである。故に龍樹は信方便の易行を取るは、自からが懦弱怯劣なるためであるとして、言はゞ責を自己に負ふものである。之に反して曇鸞では「五濁の世無佛の時」なるが故に難しとするのであるから、それは世と時とを責むるものゝ如くである。自己よりは寧ろ自己の環境、即ち現前の時代と社會とを惡むものである。こゝに吾々は明かに兩者の相違を思はせらるゝのである。

いふまでもなく吾々にして若し龍樹の立場にあつて曇鸞を見るならば、時世を罪するといふことは既に自己の懦弱怯劣を暴露するものである。而して若しその自己の懦弱怯劣なることに全責任を負はずして徒らに願生するならば、如何に辨明しても功利的たるを免れぬであらう。しかも全責任を自己に擔ふときには、願生といふことよりは、單純に佛力を念じ不退轉を求むるといふことに歸すべきではないであらうか。併し龍樹を私淑すること曇鸞の如く親厚にして、いかでこの自覺を有たぬことがあり得よう。されば曇鸞が時世を説くは、却つて龍樹の自覺を徹底せしめたものであらねばならぬ。されば如何が徹底せしめたのであらうか。思ふにその五濁の世無佛の時に於いて、そ

の中に自己を發見することが、最も徹底的に自負の念を碎くものである。自から丈夫志幹にあらずして懦弱怯劣と自覺せるは、明かに自負の念の碎けたものである。併し懦弱怯劣といふ意識の中には、なほ潜在的な自負があるようである。その限り難を捨て、易を求むる態度は必然的のものといふことは出来ぬ。併し吾々にして若し環境を見せつけられて、これこそ汝の相ではないかと明示さるゝときには、最早懦弱怯劣とさへいふことも出来ず、自負の念は片影も止めずのうち碎かるゝのである。この時代人心、これ我が如實の相である。こゝに易行道を求むるは必然のことゝなるのである。

然り易行道を求むるは必然である。といふよりは寧しろ願生道を求むるの必然である。單に懦弱怯劣の自覺のみにては、願生を求むる事柄としても甚だ力弱い。これ龍樹が不退轉を求むることを主として、願生を明説せざりし所以である。されど環境の中に自己を發見するに至りては、却つて願生が當面の問題となりて、住不退轉はその後に與へらるゝことゝなるのである。即ち願生道は常に時代人心を自己の背景として感ずることに於いてその意味があるのである。この環境の中にある限り、我は覺れりといふを許されざるところに、願生道は成立するのである。かくして懦弱怯劣の自覺を徹底して五濁の世無佛の時を黠出し、これに依りて曇鸞は不退轉を求めし龍樹もまた願生者であつたことを明かにした。若し曇鸞のこの領受開顯がないならば、龍樹の二道は單に他に對し

ての一種の方便であるか、或は修道に於ける自任と反省との二面を語るものとのみ見られて終つたであらう。曇鸞の開顯に依りて、吾々は始めて龍樹もまた時代人心を代表して願生し、信方便の易行を取れるものなることを知つたのである。

誠に龍樹の説くところは淨業の機であり、曇鸞の説くところは淨邦の緣である。社會人心は淨邦の緣である。これを見ざるものは淨邦を願ふことは出來ぬ。しかもこの緣を機に攝し、時代人心に於いて自己を見るものでなくては、淨業を修せぬのである。機を緣に於いて發見せるが故に願生道が興り、緣を機に於いて内觀する時、自力行の絶望となる。それ故曇鸞の擧げたる五三義意も、一面から見れば前四難の時代相に攝まり、一面から見れば第五難の自力心に歸せらるゝ。即ち五難は全部時世の相であるが如くして、そのまゝまた自己の相である。この意味に於いて古來の學者が、曇鸞の五難に相當するものゝ根據を龍樹の説に求め、或は五難を内觀的に解釋せるものゝ功績を認むるのである。

二

事由は自己の心靈に透徹するかぎり、それ自身の中に理由を内含してゐる。理由あつて始めて事由は成立するのであるが、しかも吾々は事由の徹底に於いてのみ理由を體驗する。理由に依らずんば事由はあり得ない。しかし事由に緣らずんば理由は知られないのである。それ故淨邦の緣により

て淨業の機を明かにせる曇鸞對龍樹の關係は、やがて願生の事由と理由との交渉を暗示するものである。それは事由に透徹せる心靈こそ、正しく理由を自證するからである。

併し事由對理由の關係は、正しく世親を繼承せるものとしての曇鸞の上に見らるゝことである。既に述べたるが如く、世親の『淨土論』はその當面に於いて願生の理由を説くものゝ如くである。觀彼世界相に始まりて故我願生彼阿彌陀佛國といひ、遂に普共諸衆生往生安樂國と結ぶ偈文を誦し來れば、何人にもそれが淨土は樂しむべきゝて願ふといふ類のものでないことは知られよう。彼の世界といふ言葉、それは誠に清淨功德として、何人もそこに願生せねばならぬ意味あるを語るものである。この清淨功德こそ曇鸞の著眼せる通り淨土の總功德であらう。世親自からの説明に依れば略説入一法句、一法句者謂清淨句として、三種莊嚴は二種清淨に攝められる。清淨は純無垢である。眞實なる理念である。依報も正報も純淨なる無爲の世界である。それ故にそこは吾々の必然的に願生せねばならぬところである。淨土を願生せしむる理由は、淨土それ自らにあるのである。

併し吾々はかく清淨世界を讚嘆する『願生偈』を誦しつゝ、いつしか自然にこの光明に反映する現實界の黑暗を想はしめられる。世親のこの願生心の根據には、如何に深刻なる現實觀があつたことであらう。二十九種の莊嚴功德は、二十九種の現實生活の透徹に於いて心證せられたに違いない。かくしてこの願生心は如來の願心に歸入して、三種成就願心莊嚴と開顯せられた。之に依りて曇鸞

は如來の願心に於いて二十九種莊嚴の反顯する二十九種の現實相を説かれたことであるが、その二十九種の現實相は行緣五難に總括せられるものであらう。それ故曇鸞の點出せる願生の事由に透徹することに依りてのみ、如實に世親の説ける願生の理由を心證し得るのである。五濁の世無佛の時も内觀するものゝみ、眞に清淨の世有佛の時を感得するのである。

之に反して若し事由の透徹なしに、單に願生の理由のみが會得せらるゝことがあり得るであらうか。淨土の莊嚴はそれ自體清淨功德として、現實の體驗から遊離して觀察さるべきものであるならば、それは何うしても吾々の願生の境とはならぬであらう。その世界は一面からは聖者の境であつて凡人の及ばざるところともいふことが出来る。古來『淨土論』の淨土は凡夫の往生し得るところでないといふ説あるは、この意味に於いて首肯せらるゝ。併し一面よりいへば、かゝる世界は觀想分別せられたる境であつて、如實の理念法界ではない。如實の理念法界は單に願心の對象となるものではなくして、實に願心それ自體を心證せしむるものである。而して願心それ自體は現實に透徹し、それを全的に否定する其所にのみ現はるゝものである。故に眞の理念法界は現實に透徹し、それを全的に否定する其所にのみ心證せらるゝのである。これに反して若し現實の透徹を外にしたる別の理性智慧ありて、それで淨土が觀察せらるれば、それは畢竟聖者の幻である。眞如實相第一義空未曾不措心は、單に眞如實相といふことを思ふても見ないものに對しての言葉でなくして、實に常に

眞如實相を想念してゐると思ふてゐるものに下されたる批判である。故に若し『淨土論』の淨土が事由の透徹に心證せられたものでないならば、その説くところは所謂聖道敎の説と簡ぶところははないであらう。しかしそれは世親の眞意でないことは、『偈』を誦し去り誦し來れば、極めて明瞭なことである。

されば理由は事由の透徹に於いてのみ心證せらるゝ。而して理由の心證によりて事由は單なる縁でないことが領會せらるゝのである。事由こそ最も具體的な理由となつてくるのである。其所に吾々は時代と社會とから逃れて獨り淨土の聖者とならんと願ふのでなくして、時代と社會とに同心し、共に彼岸の世界を願ふのである。げに彼土に於いて聖者の救に入るといふことはいかに吾々の歡びであらうか。されどそれは實に一切の往生人と共にであるからである。單なる我れ一人の抜がけの往生は果して吾々の中心の願であらうか。吾々は時代を厭い社會を憎む。しかも吾々は憎む時代を特に愛執し、厭ふ社會を深く忘るゝことが出來ない。然るに單なる事由や單なる理由の願生は、結局個人的のものである。それは吾々の魂となることは出來ぬ。時代人心は飽くまでも吾々の我慢を打ち碎く、しかもうち碎かれたる心のみが、懐かしき普共諸衆生往生安樂國の願を生む。

三

縁に依りて機を呼起し、事由を點出することに依りて理由を開顯する。この曇鸞の學は『論註』一

部を貫通するものではあるが、その最も重要なことは、之に依りて願力と佛力との二力が説かれてあることであらう。易行道者謂但以信佛因緣願生淨土乘佛願力便得往生彼清淨土佛力加持即入大乘正定之聚。往生は願力であり不退は佛力である。この二方は法藏因位の力と彌陀果上の力として相順相成して、全一の他力を爲すといふもの、これ『論註』を貫く根本原理である。

思ふに願力は事由を成立せしめ、佛力は理由の根柢となるもの、如くである。故に明かに時代と社會とを説かざりし龍樹にありては、願力を現はすこと充分でない。『十住論』には往生の語あるも全體を貫くものは不退轉であるが如く、本願の文字なきにあらざれど、全體に於いて感得せらるゝものは佛力である。自己の智力を憑むものは退轉し、諸佛の法を念ずるものは不退轉に住する。誠にその通りである。その特に阿彌陀佛のみを説かねばならぬといふことのないのは、龍樹の仰ぐところは、偏に佛力にあるからである。故に曇鸞はこの意を現はして、佛力住持即入大乘正定之聚といふ。正定聚即ち不退轉である。之に對して世親の『淨土論』では明かに願力を高調してゐる。これ蓋し往生といふことは、佛力一般で成就し得るものでなく、特に願力に依らざるは果遂し得ぬからである。随つて特に阿彌陀を念ずるといふことも生じ來るのである。併し世親の本願力といふものも、彼自から未證淨心の菩薩をして淨心上地の菩薩と同一寂滅平等法身を證せしむると解釋する限りは、特に願力といふ意味が現はれぬようである。三種成就願心莊嚴に至りて、吾々は其所に何物

か單に佛力にあらざるものあるを心證せしめられる。併しこの意味深き文字も、淨土の三種莊嚴は佛の願心の成就するところといふに止らば、彼岸の清淨を現はすに過ぎぬであらう。それが三種の成就が願心を莊嚴するものなるを心證して、其所に一切衆生に同感し給ふ大悲心を感じ、その願心によりて吾々が願生の成就することを信知せしめらるゝのである。而してそれが本願力廻向の故に至りて、彼の不虛作住持功德の本願力が開顯せられ、親鸞の領解せるが如く、功德寶海を成就して衆生に施與し、淨土に往生せしむるものなることが明かとなるのである。然るにかくも『淨土論』の本願力が佛力と簡ぶどころなきが如く見ゆるは、一應は願生の理由のみを説くものゝ如く見ゆるからであり、また深く論意に徹する時、眞に願力を開顯することを知らしめらるゝは、理由の根柢に深き事由の體験があるからではないであらうか。

故に事由に緣らずんば理由は知られず、理由に依らずんば事由はあり得ないといふことは、願力にあらずんば佛力は出現せず、佛力にあらずんば、願力は成就せぬことを指示する。「不虛作住持とは本と法藏菩薩の四十八願と今日阿彌陀如來の自在神力とに依る」願以成力、力以就願、願不徒然、力不虛設、力願相符、畢竟不差、故曰成就、願心は佛智より現はれずば、願力を成就することが出來ず、佛力は本願を出生せずんばその無限性を現はすことが出來ない。されば如何に願生の事由があつても、乗すべき願力なしには往生することが出來ぬことは明瞭であるが、しかも如實に

願力に乗るときには、既に事由の根源に理由が心證せられてある。即ち願力は單なる願望でなく、佛の願力として信知せられてあるのである。乗するとは信するであつて思ふではない。佛の願力を思ふも何の益があらう。佛の願力に乗信するが故に、其所に自から佛力が仰がれて不退轉に入る。願力を出生せる佛力が、却つて願力によりて出現せるのである。

願生の事由は明かに淨土に往生するにあらずんば不退轉に住することを語るものである。それ故その限りに於いて即時入必定といひ、菩薩於此身不退轉を得んと欲すといへる龍樹の意と一致するものではないであらう。併し事由の透徹に於いて理由を領會すれば、往生と不退とは時の順序でなくて論理の順序となり、所謂一念同時の事實となるのである。げに即得往生住不退轉である。淨土に往生するは不退に住する易き道であるに止らずして、實に往生にあらずんば不退は不可能である。彼岸を念せずして誰れか眞に不退轉なるを得べき、しかも信樂の一心にありては、願生即往生である。龍樹が諸佛の名を呼んで不退轉に住せるは、諸佛集會の世界こそ彼岸の淨土であるからである。故に彼が不退轉に住せるは、全く如來の家に生れたるが爲めであらねばならぬ。かくして吾々は龍樹に於いても、深く本願力の心證を思はしめらるゝのである。